

学海双魚

宮崎修多

にきといふも言なれば、かりがねにのするふみも言なりとて、さしもちがひなきひとのよのわざなれど、ふみはふみにしてにきにあらず、ふみにかきてにきにかかぬもまたさになむありける。これ、ことひとつづるふみと、おのがおぼえにかきとむるにきとのちがひならむといへば、いな、そもにきのおのがためばかりにしもあらぬをいかにかうがへつるや、とそしるひとあり。のちのよのひとにあてたるにき、ともがらにみるをゆるさむにき、などふみとたがふやうやある。土佐のにきはをんな手になずらへしあやかしごと、断腸亭のあるじのはよのうつりざまなげくすがたをつくろひけるにきにて、いづれもおのがためのみにはみえずなんどげにしくいふ、なまさかしらのいひぐさよ。ことひとつづるといふも、おのがおぼえといふも、いづれ文のすがたのいひわけにして、まことはなにとてもよし。文のさまかはればをのづから手のかはり、かきてのころばへもみづからさまかへつべきしなしをこそいふなれ。よみてもまたそのしなしにしたがひてたぬしぶにしかず。いま、文つかさどるひとのにきといへばつくりごとにみるならひ、自他真偽のべちにいそぐものから、にきをかきてのまこととみるさまよそほふあだしごころとていでむやは。このあだごとにひりずむにていふにあらず。てくすとかきて

よりうばふはよし。うばひてのちなまじひにかきてをみざるはあさまし。いづれか文にあそぶのところにちかき。さればふみはふみにしてにきにあらざとなむ。さいつ年、学海居士依田百川がにきをひるがへすことたび／＼なりしほど、まめなる居士がふでにせざることありや、ふみあらばそのわいだめあきらむべきにとこそおもひしか。梅潭と雅談す、詩話すなどばかり、はなしぐさ欠いたるくだりおほくてくちをし。梅潭杉浦誠は居士がともがきにて、詩のせんだちなり。征夷府につかへて箱館奉行たりしも、世あらたまり、ふたたびつかさめされて蝦夷地におもむく。居士とは明治二とせ公議所集議院にてしるやうなりしが、まじはりしげくなりけるは二人のおほやけごとしりぞきてのち、明治十まり八、居士五十三、梅潭六十のときよりして、梅潭みまかるまで明治詩とふみのゆききたえず。そのひまご、いまのあるじ杉浦俊介ぬしのもとにのこれる学海居士のふみ八十あまり。居士が廬に招ぎしものと詩のただされむをこふものほどなるなかに、にきにあげぬことつぐるもはつかにみゆ。れいの雅談、詩話のはし／＼これらにてうかがへば、荷風子が奇談ありのあやしきかくろへごとにはにるべうもあらぬみやびなりけらし。そも居士にはにきのふでとるまでもなきことどもにや。大沼枕山にしたがひてみちきめたる梅潭の、勝安房らが詩の手ほどきさへしけるはひともしるほどなれば、としのなかごろよりは居士の詩もはら梅潭にみちびかれてものすといふべし。居士がふみにおもへること一二。しば／＼李長吉につきてのべたるは居士老いつきてのこのみならむが、おのがはぐくまれし宋よりより晚唐中唐にさかのぼるいきほひ、ときに明にあそび⁷²、さらには稲津南洋との詩あらそひのうちに五言の古詩を詩のおやとたてまつるにいたれり³⁰。これ清の沈帰愚が唐の格調へほんけがへりをこころみしにはにず。長吉と飛卿とあはせあちはふ⁷³居士が古詩に手をそむるも、けだし詩のおもむきをいまやうにひろげむためのみそかなるたたかひか。また、明治三十年のほど

より漢牘すくなし。みやびたるまじはりもやうやうわたくしごとにおよび、川田鑾江のなくなりしより明治二十九年このかた、ともにかたらふともどちなくて、かんなにてころのまにまにいふをはばからずなりにたるか。その梅潭にもさきだたれたる居士のかなしび、またいふばかりなし。屋梁落月帖は鴨北宮本小一のあむところ、梅翁みまかれるをいたむ詩歌あつめたるが、いまに杉浦氏につたふ。帖のうち居士のなきうたふたつ、俯仰山河涕淚紛、老懷曷耐失鴻群、文章海内悲知己、交友人間喪此君、鉄笛吹残五更月、杜鵑啼破半天雲、吟魂不返今安在、猶有声音耳底聞、また、遣老前朝剩此翁、靈光莫奈也帰空、善詩年齒同高適、愛客襟懷似孔融、尋夢江湖総陳迹、回頭天地復薰風、娥眉痛哭知何処、燕子樓台夕照中。ここにふみのゆききたえ、一とせへぬうちに、居士がにきのふでとることもやみぬ。よをさる明治四十二年まで八とせをあまして、居士のおもひをやるすべまた何にさまかへけむや。あはれ、いとしきつまにおくれけるをこの如しとて、比目のいをならぬ双魚のかずく版におくすも、それらをおもふすがなれかしとこそ。平成五年の冬しるす。

例言 一、配列は判明する出翰の年次順。

一、*以下いささか愚按をのぶ。日録とは無窮会図書館蔵『学海日録』(岩波書店版『学海日録』全十二巻による)、別墅雜録とは韓国国立中央図書館蔵『墨水別墅雜録』(吉川弘文館版『墨水別墅雜録』一卷による)をいふ。

一、贈詩箋の体で残れるもの多きも、年記なきものこたびは省く。ただし葉書に詩のみ書せるは書翰に準

じて載す。

- 一、書翰および詩文の句読はすべてわたくしに付す。異体の字はおほむね通行字にあらたむ。
- 一、当翻字は原蔵者杉浦俊介氏と仲介者田口英爾氏の厚意による。

◆1 明治十八年九月十四日（一錢葉書）

墨水ノ家は柳北ノ真向なり。番地は面にしるせり。

垂楊深鎖讀書樓。墨江波澄雨始収。幽紫靜紅風露濕。野人籬落最宜秋。

明十五日早旦より弊墨水の草廬に御出かけ相成候てはいか、。弊園に萩花盛りなり。又梅やしきも只今秋花真盛なり。早涼に御同行いか、。是非ともく。

十四日

如何様早朝にても不苦候。

〔表記〕下谷立花やしき内杉浦誠様、向しま須崎村二百十二番地依田百川

〔消印〕「本所・東京・一八・九・一四・リ」

*葉書表住所脇に「淡薄閑花繞舍秋」の墨書あり、梅潭次韻詩の想にや。

◆2 明治十八年十一月十三日

宮本鴨北。為僕言金洞勝。見示其図慙漣一遊。僕遊意勃発。与関根痴堂謀。痴堂以事辞。余不得独往。為之慙然。昨友人大槻修二過僕云。昨自金洞帰。因説路程甚詳。距松井田停車場三十町為妙義。往半里許即為金洞第一華表。此間黄茅白葦。無可見者。自此登路稍峻数十歩。山骨屹立。自成門闌。即石門也。經第三四。益奇益險。隗異妙絶。口不可述。然皆相距不数十歩。雖乏騰具。無不可至。出四門。下溪稍險。過之則可以就帰途也。盖金洞之妙在石門。其余双目所及莫不奇。皆往來嘯目一覽可了。僕素羸特多病不便踏險。然今秋天氣晴朗。身健無病。不及此時一遊更待何時。加以汽車路賈亦易。弁車賈往還二円六十錢。妙義客居不過一円。其余雇導者及人車賈惣計

五円内外耳。将明日午前九時上汽車。老兄勉作同遊。以共此快事何如。敢請。

百川

明治十八年十一月十三日

*封筒なし。木版詩箋使用。日録にはこの日梅潭宅を過りしこと記せり。大槻如電直伝の行程を示さんため、この箋もて訪ひしか。梅潭をともなふ金洞山行は雨天により十六日發途、十八日歸宅。

◆3 明治十八年十二月十日（一錢葉書）

尊恙如何。明十一日將至墨水。本日午後賜來訪否。金洞紀行成。応相示品評。山水最妙。

〔表記〕下谷立花やしきにて杉浦誠様、小川町壺番地依田百川

〔消印〕「神田・東京・一八・一二・一〇・ト」

*金洞山の記は十一月十九日より書きそむ。

◆4 明治十八年十二月三十一日（一錢葉書）

歳云暮矣。忽接高作。妙極莊誦數過。欲先生之高也。僕亦有一詩。

邸報頻伝刮目看。果知世路若斯難。坡翁旧友皆非職。任胄私人尽在官。半夜風声燈影暗。一庭露氣月痕寒。鷄虫得失尋常事。始覺從來天地寬。〔自評。頸聯自云佳句。非尋常詩人所曾見〕

三十一日

〔表記〕下谷区西町三番地杉浦誠様、神田区小川町壺番地依田百川

〔消印〕「神田・東京・一八・一二・三一・ハ」

*第三句の非字はもと間に、第四句の在字はもと大につくるを訂す。本律詩は日録にあるも訂正前の初案で掲ぐ。第五句末の暗字は日録では黒につくる。本翰、筆書なるも墨にあらず、ブルーブラック洋インキの如し。
【一】内は小字割註、以下も同。

◆5 明治十九年二月四日（一錢葉書）

雪後寒増幾分。伏惟尊恙。何似不見叔度丰采。数日殊覺寂寥。明五日幸見過否。午前後並無妨也。一茶雅談極妙。待貴報。

明十九二之四 百川再拜

〔表記〕下谷区西町三番地杉浦誠様、小川町壹番地依田百川

〔消印〕「神田・東京・十九・二・四・ヲ」

*梅潭は明五日に来訪、有竹碧光の急死を報ず。

◆6 明治十九年二月二十四日

梅澤先生坐下

昨過尊寓。殆類哺啜陋客。帰後為山妻所嗤笑。愧甚奈何。今日辱臨弊舍。適游墨莊。不得拜眉。遺憾曷止。見示高作。遵旨評鑄。殊冒威嚴狂甚。伏庶裁奪。墨莊梅花。池畔已見爛熳。但其巨者未發一花留。以俟執事携朝雲來賞耳。聞嬋娟來在近。可得一拝識否。早々不宣。百川再拜。

明十九二之廿四

*封筒なし。木版詩箋（赤）使用。傍点朱筆、学海の施すところか。墨水からの出翰。朝雲あるいは嬋娟、梅

潭の新たな妾千代ならむ。二月二十八日入居。のち学海が仙蝶の号を与ふ。

◆7 明治十九年三月十日（一錢葉書）

在墨上別墅。梅花盛開。以明日賜高臨幸甚。姫人同行最妙。為弊廬增光也。明十一日午前並佳。

冷艷氷姿各自憐。且將閒澹伴詩人。邨家不及高園好。亦有東風一樣春。

合浦珠還殊可憐。旧人本是勝新人。路傍花柳何曾惡。争奈自家園充春。

賜尊駕不煩報。有事不至辛煩一報於墨水別墅。番地在表面。

三月十日

〔表記〕下谷西町もと立花屋敷ニテ杉浦誠様、向島須崎村二百十二番地依田百川

〔消印〕「本所・東京・一九・三・一〇・ホ」

*梅潭日記に「午後千代ヲ拉し依田墨江ノ別墅ヲ訪□招ニ応スル也。夜帰宅。」（三月十一日）

◆8 明治十九年三月三十一日（一錢葉書）

有竹碧光墓銘成矣。文頗得意。欲与先生一品評。以明日午前見訪最妙。余在面晤。不一々々。

依田百川

〔表記〕下谷西町立花やしき杉浦誠様、小川町壺番地依田百川

〔消印〕「神田・東京・一九・三・三一・ヌ」

*墓銘は前日三十日に成、梅潭の請により。有竹碧光は学海梅潭双方の旧知。開拓使に出仕後函館県大書記官たりしも紛議を起こして自殺未遂。非職となりて東京に住す。当年二月初めに病死。梅潭が翌四月一日に学

海宅を訪ひて携へ歸りし学海自筆稿（杉浦家藏）を、句点を補つて左に掲ぐ。日録記事なる碧光行状と比せば学海が墓銘の筆法知るべし。加朱は梅潭か。

從六位有竹君墓碣銘

明治初。余以佐倉藩参事入集議院。当是時。四方豪俊。列藩英髦。皆在東京。余見一客於院中。蒼面多髯。眼光炯炯。余進与論時事。英氣不可当。退謂僚友杉浦梅潭曰。客何人。曰是野村藩参事有竹君也。余大驚遂偕定交。君名裕。初称衛門。父義韶。世仕野村藩戸田侯。君為人有氣概。不甚讀書。明大義通時務。其為議員。持論不撓。選補幹事。尋入仕為神祇權少祐。明治四年七月罷。会梅潭自静岡参事（自静岡参事ノ五字朱筆ニテ抹消）任開拓判官。知君才可用。六年薦大主典。掌警察事（掌警察事ノ四字朱筆ニテ左傍線）。君專力吏務。治繁理劇。綽有余裕。与人交益温順。尽剝去圭角。比議院時。殆如別人。十二年十二月進權少書記官。十五年置県遷箱館大書記官。十七年八月以病罷。恩例仍帶本銜給俸三分一。以十九年二月一日卒於東京私邸。享年四十九。配篠原氏。生三男二女。二子夭。第三子曰捨三。女尚幼（尚幼ノ二字朱筆ニテ未嫁トアラタム）。君之來東京。梅潭既去官。以文詩為娛。君亦日夕過從。又善画竹。与諸文士交遊。余偶訪梅潭。君在座。相見道旧。蓋距議院時十八年矣。君兩鬢尚黑而余則白髮種種。不測再逢終為永訣。悲夫。君葬在谷中天王寺側。梅潭為請銘於余。乃銘曰。虚心勁節。風霜全真。手写神采。宛見其人。

明治十九年三月從六位依田百川撰

◆ 9 明治十九年七月十五日（一錢葉書）

自誇山中陶隱居。脫冠偏喜在邨墟。曉來滴得芭蕉露。先寄故人一紙書。

僕在墨莊明十六日及十七日兩日中。以早曉見訪為妙。為明十六日最妙。

〔表記〕下谷西町立花やしきニテ杉浦誠様、向島須崎邸二百十二番地依田百川

〔消印〕「本所・東京・一九・七・一六・イ」

*消印十六日とあり、十五日に書し翌朝投函か。梅潭は十六日ただちに墨水宅へ赴く。

◆10 明治十九年十二月二十五日

曦景迅速。茲通歲暮人事極多。未能脫箇中苦境。可歎可笑。雄篇莊誦快甚。誰加批評。多罪々々。僕近日患頭痛。盖以読書著作過多也。欲擲筆硯少加靜養。莫奈簡牘如山。不得不酬答。然如此。日没一日為最。不測明日欲過高堂。一叙放懷劇談。敢容一席否。若別無報問乃敢往。余在面晤。不宣。

梅潭老先生大雅 座下

百川再拜

明十九十二廿五

*封筒欠。木版詩箋（赤・黄緑）二枚使用。二十六日に梅潭宅訪問、午餐を供せらる。

◆11 明治二十年一月十九日

昨至遷上一宿。曉起雪深三寸矣。園林變作瓊樓玉闕。捲簾楼上端座眺望。作古体一首。恨不呼吾老梅潭翁共賞之。因憶梅翁觀梅杉田。途過金沢遇雪步行而歸。苦不可言。比之僕別墅觀雪勞逸懸隔。然同朋共往自有可記。僕則独

座孤寂。只命婢煎茶擁爐耳。乃作此簡以同賞欲使妙境不寂寞也。乙亥一月十九日雪後。百川書於墨上。

書畢付郵乃歸小川坊去

*封筒、詩共になし。詩は梅潭加評の上返されしか。乙亥明治八年や己亥明治三十二年では大雪と墨水より帰宅との記事に合はず。丁亥の誤として明治二十年の尺牘とす。

◆12 明治二十年四月一日（一錢葉書）

昨三十一日瑞香分婉拳一男子。母子健全。以辱知不可不敬告。并報仙蝶姫人。

恰是桜花三月時。全家復喜拳男兒。書香他日伝応遠。再向墨林添一枝。

百川未定

〔表記〕下谷西町立花やしき杉浦誠様、向島須崎村二百十二番地依田百川

〔消印〕「本所・東京・二〇・四・一・ホ」

*愛妾瑞香との子貞美（幼名比狭古）誕生は三十一日午前五時。梅潭日記に「依田学海ノ姫人瑞光一昨日分婉男子出来之報昨夜アリ。因て今朝千代に鯉節ト次韵ノ詩を携タセ墨堤ノ邸へ遣ス」（四月二日）。

◆13 明治二十年五月二十二日（一錢葉書）

或在墨江或小川。此身殆似一漁船。蘆花明月不知処。不是雲仙是水仙。 每度蒙御尋とかく不在ニテ恐縮之至

奉存候。今日及明日は他出不仕候間御運動かた／＼小川町へ御出可被下奉待候。拙文而三篇有之御覧にも入れ申度、又芝居咄もこれ有候。

五月廿二日

〔表記〕 下谷西町立花やしき杉浦誠様、小川町荳番地依田百川

〔消印〕 「神田・東京・二〇・五・三二・八」

*前日、学海は川尻宝岑と市村座に観劇。楽屋に団十、福助らを訪ふも楽屋にはみだりに出入すべからずと巡査に叱正さる。これなん芝居ばなし。

◆14 明治二十年六月二十六日（一錢葉書）

擬將結伴浴温泉。蓄得囊中潤筆錢。好是雲烟過眼物。溪山風月化雲烟。

潤資始至手。請執鞭於塩原。然天未晴。七月初旬或可去耳。明廿七日。僕將到墨水。若得晴。老兄与侍姫共来何如。然雨則以明後日可也。僕亦雨不往。

廿六日

〔表記〕 下谷西町立花やしき杉浦誠様、小川町荳番地依田百川

〔消印〕 「神田・東京・二〇・六・二六・ル」

*絶句、日録六月二十三日条に掲ぐ。もと葉書と異同なきも、抹消して第三好是を一笑、結句風月を復去にあつたむ。日録の訂誤は二十六日以後なること分明。塩原行は七月八日より。官を罷め潤筆料やうやく多かりしも、一年を経ずして朝野新聞の劇評、国民之友の馬琴書簡などの稿を謝絶さること起りぬ。

◆15 明治二十年八月十六日（一錢葉書）

薄暮轟雷。何等快絶。今日在墨水。明早凉氣必至。賜尊来以談雅懷何如。伏待之。

八月十六日 在墨水 明日御都合あしくは明後日十八日にても可也。

〔表記〕 下谷西町立花やしき杉浦誠様、墨水須崎村二百十二番地依田百川

〔消印〕 「本所・東京・二〇・八・一六・ヲ」

*この日の恐らくは出簡直後、昼前に梅潭来訪、午餐をとみにす。

◆16 明治二十年十一月九日（二錢葉書）

久不接丰采転増懷望。明日在小川町家。賜来訪妙甚何似。

十一月九日

〔表記〕 下谷西町立花やしき杉浦誠様、小川町壹番地依田百川

〔消印〕 「神田・東京・二〇・一一・九・ル」

*翌日梅潭来訪。杉浦家養父の死を報ず。

◆17 明治二十一年一月一日（二錢葉書）

今朝与兒輩飲屠蘇酒。畢上樓欲執筆。乍得先生除夜作。朗誦一過快甚。百川亦有一首。頗詠時事未出。示此与新年作一并乞正。

羲娥倏忽去匆匆。邸報遽然驚我聰。漢法党禁勢難免。秦廷逐客事將同。雪堆富岳千尋白。香迸梅花半点紅。日暮書樓倚欄立。翠烟早已罩晴空。

乍聽鴉声呼曉來。忍寒早上小樓台。千秋雪似吾頭白。先對芙蓉一笑開。【樓見富峯故云】

戊子元旦

依田百川拝草

〔表記〕 下谷区西町三番地杉浦誠様、小川町壹番地依田百川

〔消印〕 〔東京・二一・一・一・チ〕

*七律、日録明治二十年十二月二十九日条に載。歳旦絶句は二十一年一月一日条に記しあるも、首句呼字を報に、第二句小樓台を讀書台につくる。

◆18 明治二十一年二月二十七日（一錢葉書）

瑞香病眼。在小川町宅。日往医請治。百川今日到墨水。独見梅花笑主人也。今夕一宿。明日廿八日猶滯留。幸先生以午前来訪。終日談論以尽一日何如。

二月廿七日

〔表記〕 下谷西町立花やしき杉浦誠様、向島須崎村依田百川

〔消印〕 〔本所・東京・二一・二一・二七・ヌ〕

*瑞香が居なくとも墨水には赴くのである。梅潭は翌日来訪。

◆19 明治二十一年四月四日

在本月十日前後。僕毎歳花時來此幾日。然以塵事全集。不得暫住。不図今茲偶然住此。嗚呼。人事真不可知矣。今朝早起至木母寺。遠望樹上藹如紅霧。盖花將発而未発。此妙境非久住物不能解也。明五午前。辱賜來訪。同賞

此何如。延頸而待之。

梅潭先生座下

戊子四月四日

依田百川謹上

*封筒なし。木版有界詩箋（赤、湘管戲鴻堂製）使用。前欠か。墨水からの出翰。五日は梅潭事ありて来らず。なほ別墅雜錄同日条にも至木母寺。樹々將発。藹如紅霧。と。

◆20 明治二十一年八月七日自宅宛（一錢葉書）

昨日横川へ十時着。これより道あしく大に難儀いたし、坂本駅より山路に入る。幽邃奇境筆つくしかたし。一時半につく。大低日光の如くにして岩石尤それより奇なり。塩原に似て溪流近く石亦大に妙なり。遊仙峡といふ所は老樹陰々として大石天に摩し、溪流雪を碎きその間に落来り、路は溪上にあり、この峡を出て、金洞瀑あり。さまでに大ならねとも佳麗の泉なり。処々に別館の地あり。榜示をかゝく。余か一行は錦楓館に宿せり。棲溪水にのそむ。只湯は甚ぬるく日なた水の如し。これのみ面白らす。よりて帰路伊香保至らばやと思ふ。未だ定めず。もしかしこに至らは十五日を過くへし。石怒雲奔互送迎。誰施奇嶮割塵情。鳴澗飛泉各争響。併作満山雷霆声。此郵書看終りたらは美狭古に命して杉浦梅潭先生に送るへし。七日。きのふ両日とも冷氣秋の如し。単衣にては寒を覚ゆ。

〔表記〕東京神田小川町壹番地依田百川宅へ、上州碓氷郡霧積山温泉錦楓閣ニテ同人

〔消印〕「横川・上野・八・七・ろ」（二箇）「東京・二二・八・七・ル」

*前年に開かれし新興の温泉地、上州霧積行。自宅から梅潭へ転送され梅潭の手元に残る。詩は同行の中根香

亭の詠に次韻せるもの。香亭作は、驪山含笑遠相迎、青黛雲鬟太有情、況復林間天樂起、松声落処碎溪声。詳しくは日録にあり。

◆21 明治二十一年十一月二十三日（一錢葉書）

戊子十一月廿三日過滝川小憩若葉亭觀楓

回首曾遊是夢中。山河滿月入秋風。柴橋換木溪流濁。霜葉獨留前日紅。【其一】

路隘輕車不可停。溪辺屈曲蘚痕青。主人好事殊堪喜。紅葉中間置一亭。【其二】

雨後清流長半篙。紅楓染得遍晴皐。好風景足千金直。不恠旗亭酒價高。【其三 供午餐餚殊貴故云】

〔表記〕三崎町荅丁目五番地杉浦誠様、小川町荅番地依田百川

〔消印〕〔武藏・東京神田・廿一年十一月二十三日・又便〕

*この滝野川觀楓は妻淑を伴ふ。詩三首は日録にも記載、小異あり。

◆22 明治二十一年十二月二十二日

尊駕辱臨不得拜晤憾々。昨在墨上今日帰廬。伏読高製妙甚。不顧僭越謬加妄批。賜一盼幸甚。寒雨靡微。歲殆將尽矣。白髮相對豈不点然。

依田百川再拜

梅潭先生侍史

明治廿一年十二月廿二日

*封筒なし。この日幸田露伴に『露団々』の序文を与ふ。

◆23 明治二十二年七月二十七日（一錢葉書）

百川以本月十六日発与兒女式人浴伊香保。児病腦女病子宮病也。此行多雨少晴。快事甚寡。然温泉極効二子。皆稍有起色。因以三週為期。即八月五日。百川幸以著述為業。日与筆硯相親耳。是以得詩不甚多云。一二首以呈請刪正。

滴瀝雨声連夜聞。山樓溪閣杳難分。夜知一脉温泉氣。化作千巖萬壑雲。【其一】

雨霽高樓暑色清。倚闌偏覺葛衣輕。赤城山上無纖翳。判得明朝是牢晴。【土人云赤城無雲明日即晴】
蒼々崖樹綠達天。逕路盤旋跡到巔。一道溪流清澈石。掬來何測是溫泉。

有暇賜一二屬和幸甚。又申。婢携児訪問。厚賜供待。此聊鳴謝。

七月廿七日

〔表記〕東京神田区三崎町壹丁目五番地杉浦誠様、上州伊香保木暮武大夫方依田百川

〔消印〕「上野・伊香保・廿二年七月・二十七日・口便」「武藏・東京・廿二年七月・二十八日・二便」

*長男美狭古の頭痛と三女珠君の子宮病とのため伊香保湯治を決行。温泉地からの書信。梅潭の次韻詩は八月一日に届く。

◆24 明治二十二年十一月二十二日

一三日来腦重氣鬱。讀書則倦執筆則怠。殆成一種病矣。若久之或発狂亦未可知也。請先生來過。快談一日以逐去

病魔。杜少陵子璋鬻餽句。医人頭風理或有之。伏俟來駕。

依田百川敬白

梅潭老先生坐前

己丑十一月廿二日

*封筒欠。木版詩箋（黄緑）使用。杜詩とは戯作花卿歌中の句、子璋鬻餽血糢糊、手提擲還崔大夫。果してこの日梅潭来りて大沼枕山の評せる学海詩をもたらず。

◆25 明治二十二年十二月？日

梅潭先生台下

歳云暮矣。百感蟄集。意懷惘然。無以為情。欲与先生一快談以遣之。幸以午前見過。循例共午餐。談笑半日如何。伏候台駕。

年光将尽市声中。黯淡同雲料峭風。此際偏欣春意洩。盆梅乍拜一枝紅。

己丑十二月

依田百川敬白

*封筒なし。木版詩箋（黄）使用。十二月中梅潭の来訪は二十四日のみ（日録）。当日の出輪か。

◆26 明治二十三年四月二十八日

桜花落尽。新緑成陰。流光転眼。真一夢哉。頃獲黄石翁八十寿筵招状。中有自寿詩。不自量次其韵。僕不善韵語。至五七律体。拙劣殊甚。此作廁之諸大家。不啻滕薛於晋楚。幸賜斧削得成韵語。何幸若之。又頃有贈女優升承詩。附呈。

絶伎女優天下無。再生阿国動三都。結城宰相今何在。誰贈当年玉念珠。

梅潭先生侍史

百川

廿三年四月廿八日

*封筒欠。木版詩箋(赤)使用。岡本黄石八十寿集は五月十一日、八百松楼にて開催。三百人余出席の盛会にて伊藤博文らも参ず。升丞は千歳米坂とならぶ本邦初期の女優岩井糸八。このころ改め升之丞といひ、動止容貌九代目に似て女団洲の異名あり。学海、この月十七日寿座にて浅岡、板倉重矩、曾我五郎(早苗鳥伊達聞書、夜討曾我狩場囃)に扮せし升之丞を見、楽屋を訪ふ(別墅雜録、歌舞伎年表。翌二十四年十一月、遂に米坂、伊井蓉峰ら男女混合劇の済美館一派の興行公許を得。されど女団洲のごとく女子にして男子に扮するを見れば、男子にして女子に扮する陋習を打破せむといふ一派の美名どれほどのものなりしや、知らず。

◆ 27 明治二十三年七月一日

梅天黯淡不堪悶々。惠然来臨。以例午前。小楼閑話。且消永日。何如。

撰拳不知当幾名。何人頭上疾雷驚。呉儂眠在高楼上。車馬門前轆轤声。

百川

梅潭先生侍史

廿三年七月一

*封筒なし。木版色刷の詩箋に書かるも題詞が主、詩が従の書式にて書翰扱とす。

◆28 明治二十三年七月三日（一錢往復葉書返信用）

諸記の誤にて先生ヲ勞し恐入候。依之左伝ト相考候間、右為謝罪左伝ヲ不殘クリ広ケやふやく見出し申候。

襄公十五年。鄭人納賂于宋以馬四十乘与師筏師慧【すへて当時師某といふときは皆盲師なり】。師慧過宋朝將レ私焉【注私小便】。其相曰朝也【相レ師者】。慧曰無人焉。相曰朝也。何故無人。慧曰必無人焉。若猶有人。豈其以千乘之相易淫樂之賂必無人焉故也【千乘相トハ子産ヲイフ。宋人子産ノ為ニ鄭ノ盜ヲ殺サスシテ盲師ノ賄ヲ納レテ後ニ盜ヲ鄭ニカヘセシヲイフナリ】。これ式の事諸記スルコト能ハスシテウカト御返事申上さて（記臆ハワルク相成申候。早々。

〔表記〕三崎町壺丁目五番地杉浦誠様、小川町壺番地依田百川

〔消印〕「武藏・東京神田・廿〇年七月・三日・ヲ便」

*消印年記見えざるも日録記事より当年とす。梅潭の瞽者に奇人ありやとの間に、学海が韓非子にありとして（実は左伝）、楽人師慧の逸話を示した記憶違ひを自ら訂せしもの。返点原翰のまま。

◆29 明治二十三年十二月九日

昨依例辱厚遇感荷々々。李長吉詩。是百川二十二三時所手写。今閲之。当日光景宛然在目。長吉詩麗語奇語鬼怪語。層見疊出。不可尽解。盖在作者亦不自解者居半耳。長吉同時白香山。平易簡直。絶無此艱澁語。亦自是一派。今人欲強解之。非愚則痴矣。僕頃作一篇擬李并録以呈病。賜刪正幸甚。

廿三年十二月九日

百川

梅潭先生侍史

*封筒欠。惜しむらくは同封されし擬李の詩箋、杉浦家に残らざるがごとし。削正の上学海に返されしか。李長吉の集はその後明治二十六年四月購入。

◆30 明治二十四年二月十一日（一錢葉書）

過者と稲津南洋鬪詩。至十篇而止。猶英氣勃々不止也。其冊積在案。先生有暇。明日【十二日】依例従早朝見相過妙矣。相与商確論評。不亦解乎。又頃得唐百家詩選。王荊公所選。頗多古体。最与鄙意相称。自与南洋鬪以来。益読五古以養銳氣。頗有所得。以為詩尽於五古。節短而氣勁。語簡而意足。若七言。音調較緩語句較冗。不若五古之易学也。僕頃日小説文字業果畢。將費数日之暇以学之。先生以為何如。余在面罄。早々不宣。百川拜上

梅翁先生 坐下

廿四年二月十一

〔表記〕 神田三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町老番地依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・廿四年二月・十一日・チ便」

*稲津南洋との鬪詩は一月末頃から始む。いづれも時事に感じての五言古詩。王安石編唐百家詩選購入は二月四日。享和二年和刻の官版にて唐本でなし。

◆31 明治二十四年四月十二日（一錢葉書）

初欲越函嶺遊駿遠。忽聞西京花信。不堪喜躍。遂携老妻。以本月八日発入西京。十日觀花嵐山。花候漸半。裙

屐如織。

壁間再讀旧題詩。倏忽年華白髮知。松翠桜紅看愈好。自誇曾不誤花期。

皓質蒙霧彰。紅肌罩輕素。一面錦滿山。浩蕩春風度。流水駛以潔。花光若相慕。雲褪萬松動。石破驚瀑吐。徘徊澹究与。蘭撓宜游沂。塵夢憬然醒。煙霞医沈痼。

將以明日発京。遊宇治吉野。遂到浪華。駕舟赴安藝觀嚴島。追航豊後跋涉耶馬溪。以副平生之希望也。幸致諸友意。

廿四年四月十二日

〔表記〕東京神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、西京姉小路俵屋にて依田百川

〔消印〕「山城・京都・廿四年四月・十二日・ホ便」「武蔵・東京・廿四年・十三日・二便」

*この西遊、妻淑を伴つて、東京を四月八日に出発、京都（九ゝ十三日）、吉野（十三ゝ五日）、初瀬（十五ゝ七日）、奈良（十七ゝ八日）、大坂（十八ゝ二十日）を廻り、高松、小豆島、尾道、嚴島、赤馬関（下関）と舟遊せし後九州に入る（二十九日）。小倉から中津、耶馬溪と観覽して再び赤馬関に戻り（五月二日）、尾道、百貫島を経由して大坂に帰投（九日）。十二ゝ四日に京都滞留、東帰は十五日。旅行好きの学海にして最も遠地に至れるもの。俵屋は彼の常宿（後出）。十二日は雨天にて吉野行を明日に延ばし、間暇に口占せることし。葉書表に梅潭朱筆にて「四月十三日入」。

◆32 明治二十四年七月二十八日（一錢葉書）

梅雨後暑氣大進。僕携次女墨上別墅。綠陰如水。紅荷送香。晚起書樓。灑氣滿肺。聞尊駕遊函山。不知近日還輟否。有暇明廿九日。見臨墨莊。快談半日何如。味爽望駕。鷄胥炙茄。以薦粗糲。亦間中一滴也。

廿四年七月廿八日

依田百川敬白

〔表記〕 神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、向島須崎町改百六十五番地依田百川

〔消印〕 「武蔵・東京本所・廿四年七月・二十八日・手便」

*梅潭訪問は翌々三十日。当月十八日より愛孫俟一とともに箱根周遊。

◆33 明治二十四年八月七日（一錢葉書）

辛卯八月女琴柱有病。医云宜静養山中。乃帶婢瑞香遊函山。宿湯本金泉楼。

歷來曉翠暮嵐間。萬里飄輪載夢還。歸後不堪三伏熱。復携琴鶴入溪山。

一望炎雲熱滿城。官衙停午不能行。一朝跳出紅塵外。俯倚溪樓聽水聲。

鳥歌溪語愜出襟。偏覺熱來情益深。綠竹城中晤雜響。何如山水有清音。

請属和幸甚

当年は浴泉は思を絶ち候処、思ひよらざる事出来てここに及へり。人間の是非は実を知るへからざるなり。

〔表記〕 東京神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、箱根ゆもと依田百川

〔消印〕 「相模・湯本・廿四年八月・七日・八便」 「武蔵・東京・廿

□□・八日・三便」

*先月来、次女琴柱の精神病つのり、ゆえなき出奔多し。その情緒安定させんがための湯治。十七日に帰る。

◆34 明治二十四年九月四日（二錢葉書）

毒熱甚矣。殆不安眠食也。不知尊候安否。久不接芝眉。明五日清爽賜来訪樓上。稍覺涼氣快談以尽半日之歡何如。伏待台駕。

九月四日

百川拝首

梅潭老先生台下

有墨水銷夏詩十五首。呈台覽以請斧正。

〔表記〕 神田三崎町壹丁目五番地杉浦誠様、小川町壹番地依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・廿四年九月・四日・ヲ便」

*翌日、梅潭来訪。

◆35 明治二十四年十月十日（一錢葉書）

連日秋晴稍覺爽快。以明日午前依例賜来訪。縦談尽一日之歡何如。雅俗奇話如山一吐胸臆。呵々。

十月十日

〔表記〕 神田三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町壹番地依田百川

〔消印〕「武蔵・東京」・廿四年十月・十日・ヲ便」

* 十月一日に梅潭の恩師大沼枕山没。師葬儀後の処理奔走のゆえかこの時梅潭の来訪なし。

◆ 36 明治二十五年三月十日（一錢葉書）

頃来不雨則風矣。殆無陽和之氣。甚類近時政治家也。久不接道貌。鄙吝之心生焉。伏請以明十一日午前見過弊宅否。敢請依例对餐一快話。

明治廿五三月十

依田百川拜上

〔表記〕 神田三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町依田百川

〔消印〕 「武蔵・東京神田・廿五年三月・十日・ト便」

* 梅潭来訪は果たせざるが如し。

◆ 37 明治二十五年四月十四日（一錢葉書）

坡翁与巢元脩牘。牢城失火烧蕩十九。雷堂亦危飛焰已燎塵矣。僕昨日之火殆類此。坡又云幸而雨瓢無恙。僕不飲一滴。瓢固無之也。騷擾之隙。雖有所失皆不足惜者。有詩云。猛飈攪虛空。砂石尽掀拳。一星火忽閃。狂奔誰能禦。群虎長嘯動。千蟒赤舌吐。滿目皆瓦礫。萬戶只斷礎。蝸廬况矮小。殆付楚一炬。幸得大庇祐。得免饑寒苦。琴書喜無恙。嫩竹夏後圃。春雨灑庭除。花間聞鶯語。

明十五日幸間暇。若賜来駕以尽近日之佳談。

梅潭先生執事

四月

〔表記〕 三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・廿五年四月・十四日・リ便」

*当大火は猿楽町から出火、神田一帯四千戸余を焼亡。小川町本宅は隣家まで火及ぶも危ふく免かる。

◆38 明治二十五年六月十八日（一錢葉書）

聞梅潭南洋二君養病於大磯有此寄

海天梅雨黯。驚濤萬嶽崩。二豪对此景。傲睨英氣騰。消磨今猶未。飛揚昔既曾。因想老義盛。大宴會酒朋。叱咤罵海若。視人若蒼蠅。何測一虎姬。貞操潔於冰。知公弔遺跡。逸興時可乘。宿疾脫然愈。赫若太陽昇。嗟吾甘蠹魚。蕭寂守書燈。独喜耐饑寒。飲水枕吾肱。何日破慳囊。追隨試擔簦。

〔表記〕相州大磯駅いわしやニテ杉浦誠様稲津濟様、東京小川町壹番地依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・廿五年六月・十八日・へ便」「相模・大磯・廿五年六月・十九日・□便」

*梅潭と南洋の大磯療養は六月十七日から十九日まで。なほ当詩は後日わづかに字を改め、さらに一首疊韻詩を加へて大磯に送致せるもの杉浦家に残れり（略す）。

◆39 明治二十五年十二月十二日

昨候潭府款待如例伏此鳴謝。

頃日寒威頗嚴。擁爐兀坐。冬課始畢。忽接高作。不覺拍案稱奇。引筆妄評。多罪。僕將以明日到墨水。見庭園芭蕉。束藁剪除枯荷。以候春來。十九廿日間欲迎尊駕。至小川坊艸廬。讀詩論文。聞議院多事。又官衙以五時退。

賢勞可想。顧僕与先生。従容風月。使渠輩聞之。將羨望不已。如何々々。

梅潭老先生侍史

百川再拜

壬辰晩冬中二

*封筒なし。結局梅潭來訪は十九日なり。十一月二十二日閣議決定の官庁執務時間改定による五時退庁についての「賢勞可想」はもとより皮肉。

◆40 明治二十五年十二月十八日（一錢葉書）

歳旦暮矣。聞官衙以五時退。寒朝視事氣尽心痛。可知也。吾輩擁炉談書。雖貧甚矣。心則安也。明十九日。幸賜臨駕何如。因例終日晤談飽喫。閑人之樂不亦快乎。俟文駕。

十二月十八日

依田百川再拜

〔表記〕 神田区三崎町壹丁目五番地杉浦誠様、小川町老番地依田百川

〔消印〕 「武藏・東京神田・廿五年十二月・十八日・チ便」

*前翰に重ねて來訪を請ふ。いささか官事に恋著する氣味ないわけでなし。

◆41 明治二十六年二月二十八日（一錢葉書）

陰、雲、碧、落。疾、風、廻、響、宇。乍、下、滿、天、雪。祈、寒、何、太、苦。樓、峻、玉、棟、垂。樹、虛、天、葩、吐。饑、鰥、泣、幽、潭。寒、禽、迷、遠、浦。茅、廬有寒儒。枕書閉蓬戶。街衢絶軫蹄。寂寞香一炷。憂世蕪所底。隱痛刺肺腑。勢位感則傾。流水滯則腐。富貴雖若

美。然憤之所聚。俊哲何不知。四時有次序。如何慕爵祿。調停煩聖主。偏恐愚氓狂。不獨責政府。戛然驚折竹。雪勢益掀舞。何時逢快晴。春意啓宿莽。

癸巳二月廿七日大雪作

〔表記〕三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町老番地依田百川

〔消印〕〔武藏・東京神田・廿六年二月二十八日・二便〕

*雪は二十七日午後から降り始む。朱筆による句点圈点あり。

◆42 明治二十六年三月二十三日（二銭葉書）

与梅潭恕軒岡君觀梅江東用林和靖句為韻七首

天地聚淑氣。梅花清以癭。鉄骨老愈壯。孤介能容吾。臥龍嫌媚態。故為着花疎。趁春尋旧蹟。碧苔覆古井。緘塵吹不動。雨歇東風靜。佳人粲一笑。清香澹素影。慕芳簇裙屐。奈此玉骨清。恐被塵情泥。何語為品評。只応一炷香。古琴对花横。春風吹野渡。花香到水涯。清節厭繁囂。賞心在田家。最是銷魂處。竹外一枝斜。春意溢碧落。靈氣沁骨髓。不知花処所。幽香薰衣履。冷雲凝成团。斜陽半漠水。曉聞鳥声起。終日看花行。不唯得吟侶。雨後逢新晴。今宵紙帳底。夢魂不堪清。未向月瀬勝。清賞嘗一變。散策出東郊。吟咏聊自遣。詩句多套語。耻吾器識淺。

〔表記〕神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、向島依田百川

〔消印〕「武藏・東京本所・□□年三月・二十三日・ホ便」

*明治二十六年三月二十三日、たまたま寺島で梅見せる梅怨二子と逢ひ、亀戸の梅屋敷に看梅詠詩（別墅雜録）。分韻されし林和靖の句は名高き「疎影横斜水清浅」（山園小梅）。この時信夫恕軒のみ何事かに怒りを発し早々に帰りしと。句点墨書、また紙面水損あり。学海遺稿（無窮会圖書館蔵）に当詩後恕軒評あり曰く「七首清峭雅澹。短古上乘。余殊取第四第六」と。

◆43 明治二十六年六月十六日

百川啓。入本月来心氣陰鬱。久不作詩文。除写字為生活。外唯読幾部書以遣悶耳。尋以梅霖淋漓益加幽沈。平生之意氣殆一掃而空矣。若徵先生来發揮之。不知爾後何以消遣。謹俟来駕莫遲々也。敝宅小庭数笏。苔石添緑。鬱竹嘯雨。隔断市塵。此独稍絶人意。与先生相对快談。乃爾為妙焉。外姪児上学邇。過口以呈此字。艸々不宣。

劣弟百川再拝

梅潭先生降帷下

癸巳六月中六

昨過潭府。遺却拙詩文各一首。幸賜批正見携返為祈望。

*封筒なし。この日梅潭来訪を得て巖谷一六の借金話などあり。

◆44 明治二十六年八月二日（一錢葉書）

連日炎蒸。俄思浴泉。勃然難抑。嚮請先生。以視家無人見辭。乃請恕軒。亦辭以妻病。悶々不止。忽有人約往。大喜。今朝馳至其寓。則不告而發。勢不可中止。駕汽車至湯本。浴客闐咽。主人色不懌。婢僕慢獨客。不為礼。延入一室。三面是壁。熱不可堪。至是悔不及也。回顧墨水。柳翠荷白。清風滿樓。殆似在天上。嗚呼棄已從人。率如此。今夕一宿即歸去耳。茲告悔。以聊自慰。先生其莫笑笑海好多事乎。呵々。

梅潭先生侍史

依田百川

八月二日

〔表記〕東京神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、箱根湯本依田百川

〔消印〕「相模・湯本・廿六年八月・二日・□便」「武藏・東京・廿六年八月・三日・イ便」「武藏・東京飯田町・廿六年八月・三日・□便」(二箇)

*当日同行する予定で先行せしは、椿村の人菅治兵衛。湯本の宿で冷遇されひとり慄然とせる居士をかし。一浴ののち氣をとり直して塔ノ沢から福住旅館まで足を延ばし、偶然にもこの日のうちに福住で昔と落合ふ。句点墨書。

◆45 明治二十六年八月十七日?

謝者酷吏迎來故人的是一快。今早文駕來臨以尽今雨之情。何如風簾高捲矮几陳書。只欠一箇耳。伏待伏待。

八月十七日

百川再拜

梅潭先生座下

*封筒なし。年記なけれども文勢および天候より当年とす。ただし十六日の誤にや（梅潭日記による）。この日午前中に訪うた梅潭は午餐に洋食を供さる。

◆46 明治二十六年十一月二十日

胸中鬱積俗氣徹骨。不請先生文駕一詰之。果何所底止。伏望梅潭先生仁慈。惠然来臨以医我病。

百川再拝

梅潭先生 虎皮下

癸巳十一月廿日

*封筒なし。当日梅潭来訪あり。息讓三や妾千代の事を話す。

◆47 明治二十六年十二月十四日

兎烏奔馳復亦一年矣。老境益逼世事益稠然。一副傲骨三寸靈舌。猶堪独立人間。冷罵一世。循例請文駕。惠然来臨。一快談以压歲尾何如。

廿六年十二月十四日

百川再拝

梅潭先生几下

*封筒なし。この日梅潭来訪して終日談ず。

◆48 明治二十七年一月十四日（一錢葉書）

過日は大御馳走奉謝候。茲に一作を得申候。

送前議員帰郷【此作次韵ヲ乞フ】

喧然群雀散。天外各分飛。党議無邪正。郷論半是非。前程烟漠々。行路雨霏々。再挙知何日。重遊約莫違。【比喻】

次信夫恕軒韵

大筆如椽足自珍。河東從此趁時春。吾須待日温風緩。君共看花笑柳顰。

椿の花根ヲ出し置候間、御人被遣候は根いたし度候。

〔表記〕三崎町壱丁目五番地杉浦誠様、小川町壱番地依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・廿七年一月・十四日・ト便」

*梅潭宅訪問は十二日。

◆49 明治二十七年一月二十日

盆梅放香。一室為香。紙帳護寒。書房為暖。亦寒中一適也。今日循例賜尊駕來臨。何幸若之。專俟專俟。

百川拜上

梅翁先生 虎皮下

廿七年一月廿日

*封筒なし。この日梅潭来たり詩話午餐。

◆ 50 明治二十七年二月十九日

頃所得中州文徴。係竹副井々從支那帶來者。裝潢整齊。外皮不見打疊痕跡。蓋購之未及就畢耳。能積者未必能說。能蓄者未必能費。可以一笑也。

一兩日稍覺微煖。尊候安否何似。今日有暇。賜來駕高談半日。以吐胸襟。頃讀張船山集。間有所得。把玩研究。互尽討論。未必不為一日之益也。伏候促駕。不宣。

百川再拜

梅翁先生大人 侍史

廿七年二月十九日

*封筒欠。張船山詩集八卷、中州文徴二十六卷いづれも琳琅閣にて去る二月七日に購入（計九冊）。唐本。この日梅潭來訪、詩話す。竹添井々旧藏本についての寸言厳し、藏書家諸兄よ反論したまへ。

◆ 51 明治二十七年四月四日（一錢葉書）

先日八日帰宅可致候処少々都合有之九日に相成候間、左様御承知可被成候。先日より度々手紙差出候。と、き候事と存候。○祇園の花盛なり。此詩梅潭先生へ御見せ被成候。

觀祇園夜桜 【電燈照之其光如玉】

紅雲萬朶半空湧。如此名花天下無。說与東人誰敢信。一株力解動全都。

祇園社有垂糸桜。一株大覆數十畝。殆如白雲湧山。都人看者如堵。絃歌徹夜。

〔表記〕東京神田区小川町壹番地依田百川宅、西京丸山俵屋方依田百川

〔消印〕「山城・京都・廿七年四月・四日・又便」「武藏・東京・□□年四月・五日・□便」

*京都より自宅への帰宅遅延報。転達されて梅潭の手元に残る。詩は次掲の書簡に添えられし詩稿第一首の草案。当西遊は三月二十七日に発途、念願の月瀬看梅を終えて伊勢神宮参拝。神宮皇字館にて源氏物語隱微の説について講演。四月三日夕刻に京都到着。八日まで滞在。

◆52 明治二十七年四月六日

西京客居。春雨蕭然。頗有思郷之念。此舍在円山祇園祠北。登樓而望長楽知恩。俯在眼下翠巒与紅桜相映。緑柳与素梨相倚而飛。樓層閣壇現出沒其間。実一幅画図矣。初以廿七日発東京。宿名古屋。明日自草津転出伊賀。柘植駅雇人車。雨中宿上野。明日遊月瀬。花候正旺。萬梅如雲。溪流噴雷。縦観一日。卅日経参宮鉄道。至伊勢太廟。留四日。俄聞西京花事稍盛。不堪疫癘。急駕汽車。以三日入西京。時祇園垂糸桜盛開。遊者雲集。絃歌徹夜不止。明日訪江馬天江小野湖山。皆歡迎雅談。湖山特懇問先生安否。僕為告其近況。湖山大喜。但懶不作書。命僕伝意。僕將以明日遊嵐山然後帰。然今日雨甚。不知得遊否也。将期在近面晤非遠。伏惟以時自重。

明治廿七年四月六日

依田百川再拝

梅潭先生坐下

〔封筒表〕 東京神田区三崎町壹丁目五番地杉浦誠様無事、西京丸山潑翠楼俵屋ニテ依田百川

〔消印〕「山城・京都・廿七年四月・六日・□便」

*本翰に同封とおぼしき詩稿〔学海書屋〕野紙使用〕左の如し。

祇園看桜五首

紅雲似擁萬仙妹。如此名花天下無。說與東人誰敢信。一株艷色動西都。

殆是春風似有私。祇園一樹偏多姿。仰見霽天皎如雪。百尺倒垂千萬枝。

雪山聳與碧山高。至此嬌桜翻覺豪。一陣唯看暮風動。九天驀地捲銀濤。

玉女三千看艷容。此身恍在月宮中。分明照出萬花白。一点電燈懸碧空。

絃歌聲湧萬燈中。一刻千金豈得空。三日東山春最好。香魂猶未怯飄風。

西京客舍滯雨二首

檐聲終夜響。起看曉雲沈。雨濕花光艷。煙籠峯影深。峨洋自成曲。山水獨知心。文字縱雖拙。或將近雅音。

留滯何曾惡。心安夢亦閑。清音煙外磬。潑墨雨中山。柳芝皆開眼。花応尽破顔。去來任吾意。天霽且徐還。

正

百川具稿

此外なほ有之候。此分は帰宅までは非御一評可被下候。

◆ 53 明治二十七年五月二十五日

尊恙如何。連日開朗稍覺夏色。若賜來駕快談以掃鬱胸。小庭翠竹綠楓頗佳人意。專俟專俟。

百川再拜

梅潭先生侍史

明廿七五念五

*封筒なし。この日小川町を訪れし梅潭は本田種竹の「緑陰幽草勝花時」七字を五絶七首に分韻せる連作とお

のが次韻詩とを携へ来る。即ち学海も次韻。

◆54 明治二十七年八月三日頃？

南陽灣一戦後牙山之報未聞。使人悶々。薄暮散策可賜來訪否。揚眉扼腕。一快談以吐老氣何如。

百川

梅潭先生

* 南陽灣の戦とは日清戦役の端緒となりし明治二十七年七月二十五日の豊島沖海戦をさすから、それに呼応した朝鮮牙山陥落の報とどく直前の出簡。八月三日は午後梅潭來訪のこと日録にあり、また学海は牙山の大勝の号外を梅潭歸宅後の夕方に読む。恐らくはこの日午前中の言づてか。封簡なし。用紙前掲同年五月二十五日翰と同一。

◆55 明治二十七年十月五日

秋雨新晴碧天如拭。近日筆硯殆無虛日。久不作詩。伏惟老先生乘。此佳日必有巨作。明日以例見過弊廬。雅談半日。以展鬱懷何如。伏俟來駕。不宣。

梅潭老生大人坐下

明廿七十五

依田百川再拝

海陸両捷戦況頗詳。対図飽談亦一奇也。

* 封筒欠。「楽善堂蔵板」の八行野紙(赤)使用。

◆ 56 明治二十八年一月一日（一錢葉書）

嶽崎歷落白頭翁。復遇新正氣尚雄。病骨百年意憂國。辺雲萬里夢從我。窓敲飛霰箭声急。瓶挿寒梅腥血紅。企望

王師凱旋日。千門旗影動東風。新年次韻

月露風雲伝鉢衣。不知興会欲何歸。曾無寓意同韓偓。但有多才似陸機。萬卷讀過雖失半。卅年閱歷未全非。白頭

猶喜親朋共。来往論心約莫違。歲暮次韻

恭賀新年

依田百川

乙未一日

〔表記〕 神田三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町依田百川

〔消印〕 〔武藏・東京神田・廿八年一月・一日・小便〕

*梅潭原韻は乙未新年に閱歴滄桑七十翁、生逢聖世氣猶雄、藝南大纛克懷遠、朔北三軍頻破戎、隴上寒梅星斗白、城頭霽日雪霜紅、恩威洽及新皇土、萬里燕山草偃風。また除夜書懷に篋中空剩旧朝衣、遁俗斯心得所歸、偶遇故人談影事、須揮利劍斷塵機、殘杯冷炙情何竭、白髮青山跡豈非、六十九年今日尽、笑吾迂拙世相違（梅潭詩鈔）。

◆ 57 明治二十八年二月八日

数日不接芝眉。軫垣懸想如何如何。威海捷至。聞定鎮二艦悉皆轟沈。且喜且傷。喜我勝傷彼滅也。主將戴宗騫及洋人三名同死。旅順無一死者而今則有此人稍絕人意耳。今日依例賜來臨快談半日為妙。伏待尊駕。余在面晤。不

尽。

廿八年二月八

百川再拝

梅潭先生侍史

*封筒なし。日清戦最終段階における、連合艦隊による北洋艦隊主力艦攻撃を報ず。前日、威海衛の戦捷報に接せし学海は日録に定遠鎮遠の撃沈を快事として記すも、ここにおいては敵将を傷み、いたづらに喜ばざる所みるべし。

◆58 明治二十八年二月十六日

昨自墨水帰。始閱高製。循例妄加僭批。罪何可勝道。一昨遊淺草。觀所謂西洋幽靈者。絕奇々々。其第一次。少女自銅盆中出者。蓋銅盆是半截。渠穿帷幕而出其半身耳。二次最妙。蓋燈光透白色玻璃來照少女。而少女衣服皆拭与白色相近者。猶燈下觀淡紅色。作布尽為白色類。三次。少女在空中旋轉者。殊苦難知其故。想亦有暗索以懸於棟者非耶。然比之通常觀物。相距數等矣。又過墨水梅園。未盛開也。并此報。不宣。

二月十六日

百川

梅潭先生侍史

丁汝昌果降。鎮遠歸我有。若修之隱為一敵國。快哉。

*封筒なし。墨水の梅屋敷と淺草の西洋幽靈見物はともに二月十四日。別墅雜錄同日の西洋幽靈記述は、

……（梅屋敷より）還別業。再与瑞婢遊淺草。看石像化女子戲。初入場。見一銅水盤。有一女子。冉冉而出。

盤以一柱受之。無藏身処。其奇可駭。次有一女子曰石像。燈光從左側射之。自頭而面白面。而身次第變成一少女子。步至人前。言笑自若。少頃還上座。光射如初。變化為石像。次書一円相如月。有女子立其中。如浮遊。然左右前後無所附著。上下旋轉。言語分明。嗚呼亦奇矣。……

この謎解きを試みしが右書翰。年記なきも丁汝昌降伏の記載により当年とす。学海齡六十三。

◆59 明治二十八年二月二十三日

昨在墨上。忽接高作。閱之梅花下殊覺一段清氣。丁禹亭一死。成名応与寒梅爭其芳馥。況得先生推稱如此亦何幸也。誰此僭評以返璧。拙作昨送之日本新聞。以事急未暇乞高正。茲再録以求嚴斧。新聞批評謬借高名。誣妄之罪無所容。応改日乞罪。本日快晴。欲看梅亀井戸。不暇正書聊此相報。不宣。

百川再拝

梅潭先生侍史

乙未二月廿三

*封筒欠。辛子色地に赤柄の木版詩箋使用。正を乞ひし詩は無し。禹亭（庭）は北洋艦隊提督丁汝昌の号。二月十二日降伏とともに自殺。学海は明治二十四年七月十日、小石川後楽園の園遊会にて来日の丁に贈詩せしことあり。往時を回想して日本に投げる詩題に「丁。長身瘦顔。温然如春。不似武弁」と。

◆60 明治二十八年三月八日

日光温々。醞釀春色。自此爾後老生境界矣。本日循例伏待文駕。聞牛莊為我師所拔。定有高製見示為幸。又承日本新聞載拙作。未見幸帶來賜示何幸若之。

百川再拝

梅潭先生侍史

二十八年三月八

一七〇

*封筒なし。日清戦争最終段階、第一軍による午莊の市街戦と陥落（三月四日）を報ず。この日梅潭終日学海と歓談、洋食を喫す。日本の当三月二日文苑欄に梅潭作と学海作の丁汝昌追悼詩を、互ひの評を付して掲載。前翰にて斧正を受けしものなり。

◆ 明治二十八年六月三日

昨自銚子港帰。伏請依例来駕。不知近日尊恙。何如。専俟専俟。

六月三日

百川再拝

梅潭先生台下

*千葉県椿村の菅治兵衛（号椿邨）の招に応じて椿村へ赴き、五月十九日より六月一日まで逗留。帰途一日は船中に泊し二日に帰宅す。三日は梅潭病ありて来たらず。

◆ 62 明治二十八年八月七日

昨賜光臨。勿々不暇尽款曲。殊為遺憾。本日依例来駕。以暢一日之快談何如。伏候鈞旨専俟。

百川再拝

梅潭先生坐下

乙未八月初七

*封筒欠。木版詩箋（赤）使用。梅潭は翌八日に来る。

◆63 明治二十九年五月三十日

未到梅天黯淡不堪。文駕昨以有事不至。頗屬失望。今復雨恐致逡巡。奉書催之。僕臂痛未癒。袖手讀書耳。偶書此數行。猶覺隱々為痛也。請速命駕狀俟之。

百川再拜

梅潭先生坐下

丙申五月卅日

*封筒欠。木版詩箋(赤)使用。字、手痛のゆえか乱る。この日梅潭來訪を得て終日雅談。

◆64 明治二十九年六月二十?日

午前七八時尤佳

今日自墨上帰。稍覺夏色。讀書動輒厭倦。幸以明日賜來駕。以尽終日之歡如何。專俟專俟。

百川再拜

梅翁先生坐前

明廿九六念□

*封筒欠、木版詩箋(赤)使用。日付部分虫損。日録より推して六月二十六日ならむ。

◆65 明治三十年一月二日(一錢葉書)

除夜示梅潭先生【改作】

残日寒風正歲除。貧家災後蓄無余。笑吾結習難俄捨。復破慳囊購異書。

次韻見寄仍用前韻却寄

直自開春到歲除。硯田墨稼卅年余。陶朱与我誰貧富。笑指先生滿腹書。

歳端仍用前韻示先生

竹風松影接庭除。寒雀呼晴夢覺余。笑啓東窓迎曉日。床頭猶有讀殘書。

丁酉新年恭賀

依田百川再拜

〔表記〕 神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町依田百川

〔消印〕 「武蔵・東京神田・三十年一月・二日・ホ便」

* 第一詩に次韻せし梅潭詩は、故態残年猶未除、氷簾雪硯竟何如、送窮詩就任人笑、又購人間無用書。学海の第二詩はこれに次韻せるもの（日録）。

◆ 66 明治三十年五月一日

旧四月の好天氣定て御地も如此と奉存候。扱小子儀不快兎角すくれ不申候間、大磯へ出かけ海水温浴をいたし候。明日にてすてに一週日と相成大にこゝろよく食もすゝみ申候。客舎は大磯駅より三四町にて長者林と申松林中に有之、前後左右松ならざるものなし。海にはよほど近く駅中と違ひ青松白沙いさきよく、最も愉快に御座候。松林は二三町つゝき朝夕このうちを散歩し、倦むときは又海上に出て、波濤をのそみ申候。その気色おのつから別にて妙に候。本年御遊行のよしかねて御物語これ有り、御少孫なとおひきつれ遊はし海潮を弄し松間を歩し御氣保養有之候は、必ず妙なるへし。小生も又々御供致し可申と奉存候。この松林館主人は新橋湖月楼と申て小生三十年前遊び候料理店の子に候。価も他に比し候て廉カト存候。

一週日詩多く出来申候。例之下手の長談義ト拙速のみに有之候へとも、これは松坡の新聞にのせ申度御面倒候へ

とも惣評及圈点を奉頼候。明後日には帰京いたし候へとも、淨書出来候間とりいそぎ客舎より此一封さし出申候。いつれ帰京候は、早々参上可仕候。早々。

五月一日

百川

梅潭先生

気分はよろしく候へともやはり鼻は一向にき、不申、茶も湯も肴も肉もさらにわからず唯むしや／＼と食するのみ、さて／＼これには困却せり。しかし飲食の慾一通は自然と絶ち候様に相成申候。序に一切の慾をやめ候は、妙なるへしと被存候。しかし

〔封筒表〕東京神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様無事、大磯長者林松林館依田百川

〔消印〕「」・三十年四月卅日・上ルロ便」〔武蔵・東京・三十年五月・一日・ヲ便〕

*この三月頃より鼻疾あり四月に入りて悪化、ついに嗅覚を失ふ。医師に不治を告げらるも、同二十六日静養のため箕輪芳三郎とともに大磯に赴く。松林館は新橋湖月樓の支店にて、主人は多賀六郎。明治初年の佐倉在住時代に東京での常宿なりし花月樓の息子なり。松坡は旧肥前唐津藩士で漢詩人の田辺松坡。名正守、字子慎、通称新之助。田辺元の実父。晩翠吟社員。このころ毎日新聞漢詩欄（鉄網候珊瑚）の選者をつとむ。大磯雜吟と題せる学海の連作近古あはせて十一首、毎日に五月二十一・二十三・二十五日の三回連載。滞留は五月二日まで。書翰は中絶にあらず。学海六十五歳。

◆67 明治三十年九月十三日

先夜は参上致候。長居失敬仕候。扱御内話申上候狂人まつ落つき居候へとも時々かけ出しこまり候に付、今日より墨水にまゐり張番致し候次第に御座候。しかし一間にとちこめ置候間みたりに平生は出て来らず、終日退屈に罷在候。何卒明日頃遠方ながら墨水へ御出かけ被下間敷や。ゆるく詩話を試み申度は非く御来臨奉待候。明日御不出合に候は、明後日にてもよろしく必く奉願候。且又狂人一条に付、折入て相願候義も有之これは紙上にのせかたく、さりとて手をはなし参上も仕りかね候間、不得已勝手の至りに候へとも此段申上候也。

九月十三日

依田百川

梅潭先生侍史

梅莊の秋花も追々盛に候間御同行可仕とそんし居候。

〔封筒表〕 神田区三崎町一丁目五番地杉浦誠様要用、向島須崎村百六十五番地依田百川

〔消印〕 「武蔵・東京本所・三十年九月・十三日・又便」

〔封筒裏〕 九月十三日

*当翰は岩波版『学海日録』第六卷月報11(平成4・7)に紹介。狂人は妾瑞香の異父弟福島仲太郎。この七月、警察の命より監督かたがた別墅での別居を強いらる。今井源衛「愛妾瑞香の本名」(『文学』第四卷二号 平成5・4)参照。

◆68 明治三十年九月二十日

過日は参上御邪魔候。その、ち久世伯御返書拝見被仰付。同伯之御懇情不堪感謝候。しかしながら老先生の功德

ト感銘仕候。黄翁挽詞出来致候。御刪正之上御序も候は、松坡へ御廻し被下度奉願候。先は早々。

百川

九月廿日

梅潭先生侍史

〔封筒表〕 神田三崎町一丁目・五番地杉浦誠様貴下、小川町壱番地依田百川

〔消印〕 「武蔵・東京」 三〇年 二十日・二便

* 墨水宅に同居の福島仲太郎の精神病になやみし学海は、九月十六日やうやく巢鴨の「瘋癲病院」入院の東京府の許可を得る。その間に東久世通禧の周旋あり、文面より仲介は梅潭か。黄翁は梅潭とならぶ晚翠吟社の総帥向山黄村。没は本年八月十二日。右の事々により明治三十年翰とす。黄村との交際については依田美狭古「父百川の思ひ出」三（『伝記』四卷二号 昭12・2）に詳し。榛原製封筒（胡弓・書幅文様）使用。

◆69 明治〇〇年九月二十一日

拝啓。昨日入御覧候拙作尚又推敲いたし相改申候。外に二首きひしく御刪正奉仰候也。

大に〳〵御来駕被下度奉待候。

百川

梅潭先生

〔封筒表〕 神田三崎町一丁目五番地杉浦誠様、小川町依田百川、有詩在中

〔消印〕 「武蔵・東京神田」 〇〇年九月二十一日・二便

* 出翰年不明。三崎町あてゆゑしばらくここにおく。詩稿は返却しけるか。封筒前翰に同じ。

◆70 明治三十年十一月十日（一錢葉書）

題梅潭先生新居

久厭神街萬竈煙。林坊移去避塵緣。晚工翰墨黃山谷。老愛風流白樂天。露菊霜楓爐畔酒。寒鴉枯木杖頭錢。聞言世海波瀾急。高蹈何如夫子賢。

丁酉十一月

学海依田百川具稿

〔表記〕千駄木林町二百廿一番地杉浦誠様、小川町壹番地依田百川
〔消印〕「武蔵・」・十日・二便」

*梅潭移居の賀詩。三崎町宅の売却手續完了がこの九月二十三日、千駄木林町遷居は十月二十六日。

◆71 明治三十年十二月九日

其後打絶御無音罷過恐縮奉存候。扱御新居は至極御閑静之由、毎度江間些亭之噂にて承知。小生寒をおそれいまたに参上致さず懶慢之罪不知所謝候。小生義も第四女を嫁し候処其姑病氣にて過日死去いたし候に付、荆婦をつかはし色く世話致候事なとコタくいたし困り入候。それに瑞香急に咽喉病を發し療治として当時小川町に在り候次第、ますくコタくを増し候事に御座候。咽喉専門賀古と申医師にかゝり候。

一尊令孫も御咽喉の御病氣、それに仙蝶女も同病とやらん風のたよりに承及候。御察し申上候。よろしく御療養專一と奉存候。

一拙作三首入御覽候。御手透之節御一覽可被下候。此頃夜分少々暇有之候間、李長吉温飛卿をよみそれにまねい

たし七古の短きものに作りしなり。鵜のまねをする鴉かもしれず候。

一信夫恕軒又く妻を出候よしより有之、出したり入れたり何の事やら頗る困り入候事と推亮致候。しかしその子は領事に陞り次男は地方の電信局長となり候よし、幸不幸はたれも同じ事に存候。

まづは帥々如此。御序も候は、御来訪被下度奉待候。しかし寒サゆゑ小生もち、み居候間いたく不被測と奉存候。恐々。

三十年十二月九日

百川再拜

梅潭先生侍史

(封筒表) 梅潭先生侍史、百川再拜

*学海四女花枝の陸軍砲兵大尉沢茂三吉に嫁せしは明治三十年十月三十日、沢の母が没せしがこの十二月二日なり。瑞香の咽喉病のため小川町本宅に来れるは十二月六日、診察医は賀古鶴所。

◆72 明治三十年十二月廿六日

過日の御評至極妙絶殊精悍云々。小生大得意ありかたく奉存候。此度のもおもしろき御評を得申たく候也。歳暮少々風邪臥褥無聊。尊作を再閲し疲癢に堪へす再び二首を拈り出し申候。此度ちと明風をやり申候いか。御刪正可被下候。これは日本新聞に投し候つもりに御座候。過日の作は田辺方へつかはし申候。○扱議院も解散と相成申候。昨日は再会にて鳳駕洋々たる気色。今日は慘憺たる光景手のうちをかへすか如くまた児戯の如く、さてく長生すれいろくのめつらしき事を見申候。呵々。

十二月廿六日

百川

梅潭先生侍史

〔封筒表〕千駄木林町二百二十二番地杉浦誠様文事用、小川町壹番地依田百川

〔消印〕「・」二十六日・二便

* 文面および日録より明治三十年十二月二十六日とす。田辺は松坡。翌三十一年元旦の毎日新聞に梅潭新年作とそれに次韻せる学海詩を互ひの加評にて載す。田辺へつかはすはこれなり。日本へ投げる再次韻詩は七律二首（一月三日掲載）。その第一、蜃霧蠻煙極目籠、蓬萊氣象詎相同、熊羆跳躍雪山北、鯨鰐怒号雲海東、丹鳳擁樓春色麗、玉蓮載日暎光紅、廟堂必有扶輪手、萬國平和入惠風。文末は第二次松方内閣の動搖を傍觀。

◆73 明治三十一年一月三日

今年六十六歳の老翁と相成申候。可笑又可悲又可喜候。

拝啓。今年は御大喪中に付年始は申あけす候。右ゆへ草廬来訪少なく寂々たると申せとも、墨水より小児参り候に付親類の小児とも五人ほとあつまり一日大さわきに、食時などの節は養育院の食堂カとあやしまれ候次第なり。家中かけあるき芥たらけにて大に困り入申候。尊宅へせひく参上とはそんし候得とも、例の無性と遠方ゆへ今すこし春めきてのちに参上すへし。昨日一寸日本はしに出かけ候て嵩山堂にて李昌谷注本を得申候。昨夜よりよみ初申候。即御藏本と同じものなり。価は存外やすく壱円に御座候。首巻を只今読終り候。諸家の序評いづれもおもしろく注も心をとめて見可申、なほこれより一層此風を学ひ可申と奉存候。拙作別紙一首は杉山三郊

の詩を次韻いたし候ものなり。御一覽御嚴斧奉願候。そのうへ御次韻被成下候は、ますく妙なり。日本新聞拙詩を今日のせ、又尊製をも毎日より転載いたし尊名の世に盛なるをこれにしられ申候。為高齡相慶申候。草々頓首。

一月三日

百川

梅潭老先生侍史

*孝明天皇の後、英照皇太后が前年に死亡、その喪中の出翰。李昌谷（長吉）の集は学海の旧蔵書類（東京大学図書館南葵文庫、成田図書館など）に見えず、この評注本のいづれの版にあたるかは不明。これより先、明治二十六年四月五日に文化元年官版の李昌谷集を入手し、梅潭に示すことありしが、該本の国分青厓旧蔵なりしことを教示せられ驚く。杉山三郊は親友川田甕江の娘婿。日本の学海詩に桂湖邨評あり、梅潭原韻を評中に紹介す。封筒なし。

◆74 明治三十一年二月二十一日

久しく御無音罷過候。先日種竹墨水へまゐり、その、ち詩九首をおくられ候間次韻いたし候。久しふりにて絶句甚不出来に候。御直し可被下候。小生風邪後右の臂痛甚しくリウマチスなるにや。それゆゑ詩は愚息代筆申付候事に候。此字やうやくした、め申候。五官無処不風波とはこれなるへし阿々。

二月廿一日

百川

梅潭先生

*封筒なし。右臂痛の事より本年の翰とす。本田種竹の連作は日録二十日条に記しあり。

◆75 明治三十一年二月二十七日

余寒猶未退候処益御清適奉賀候。扱過日は拙作御丁寧に御批刪奉謝候。其後別紙拙作又候二首有之。これは定て先生へも御頼み罷出候事と存候豊前人なり。別巻入御覧候。諸家いつれもあり出来よろしからず候。応酬の作はこんなものかと一笑致候。拙作はやはりそのうちなるへし呵々。○小生リウマチス甚しく相成、只今うしろに手がまはり不申帶しめ候に甚困難候。依之来月大磯或沼津辺へ海水温浴と出かけ候日もしれ不申候。物価騰貴之儀これには閉口致候。草く。

二月二十七日

百川再拝

梅潭先生侍史

「梅潭先生 百川」(端裏)

*封筒なし。豊前人不明。

◆76 明治三十一年三月十四日

南洋終に亡し候よしさてく残念垂涙の事に候。未亡人氣の毒にそんな候。

拝読。余寒甚し困却居候。御脳病いか。しかし御作愈出愈妙老健しるへし。小生リウマチス頗甚しくこれにこまり申候。いよく来ル十七日発足。駿州清水港の萬象寺と申へまゐり申候。この寺は景色よろしく事ゆゑまつそれときめ申候。しかし都合により沼津へかへり候もしれ不申候。日数は大凡二週間ときめ置申候也。

三月十四日

百川再拜

梅潭先生

高作失敬申上候。春望の花恐入候。

〔封筒表〕 千駄木林町二百廿二番地杉浦梅潭先生御報、神田小川町依田百川

〔消印〕 〔藏・〕 〔種田・〕 三月・ 〔五日・ 〕 〔便〕

〔封筒裏〕 三月十四日

* 稲津南洋の没は明治三十一年三月九日。学海は同十四日にそれを梅潭から報ぜられ、後に墓碑銘をつくれり（明治三十二年五月成稿、学海遺稿所収）。本翰リユウマチの所為か字くねくねと定まらず。南洋の墓碑および交流については依田美狭古「父百川の思ひ出」四（伝記四卷四号 昭12・4）に記す。

◆77 明治三十二年十二月二十六日（一錢五厘葉書）

一昨日は御郵書候処引つゝ、き来客、御報不申恐入候。元旦の作は小生之作を太陽記者に示し候までにて尊作は即日日本へまわし置候。松坡は太陽記者より生か作をみて、その題に先生の作を次韻すとあるよりこれを和したるものなるへしとそんし候。

歳暮寄梅潭先生

嚴霜庄団第。寒飈振庭樹。流年倏爾逝。转眼悵何慕。知己偶寄書。慰安同面晤。一読開襟懷。心情見感寓。孤燈薄被冷。疎林遠夢驚。老眼耿易暗。残月墜曉霧。

○去る日関根痴堂の長子娼妓と情死いたしよし新聞に見ゆ。さてもくこまりし世の中と落涙いたし候。

十二月廿六日

昨日怨軒来訪ゆるく話し申候。

〔表記〕市内千駄木林町三百廿一番地杉浦梅潭先生、小川町依田百川

〔消印〕「武蔵・東京神田・□二年十二月二十六日・ホ便」

*消印年記判読しえざるも、一錢五厘の官製葉書使用（明治三十二年四月開始）により当年とす。翌年正月三日刊の太陽文苑欄に梅潭の盆松歌一首、学海の庚子新年次韻杉浦梅潭翁一首、同じく憶昨行二首、また松坡の庚子元旦一首を掲ぐ。梅潭の新正詩は日本の元旦号（二月一日発行）にあり。学海も次韻詩二首を投じ、太陽の次韻詩一首はそのうちより転載せるもの。痴堂息のことは日録十二月二十一日条にくはし。

◆78 明治三十三年二月十二日？（一錢五厘葉書）

久々不得拜謁日々企望候処、御来車被成候由不堪大喜候。即明十三日午前よりは非く御来車延頸奉願候也。

十二日即答

〔表記〕駒込千駄木林町二百廿一番地杉浦梅潭先生、依田百川

〔消印〕「武蔵・東京□・卅三□」

*消印の月日見えざるも、日録記事よりしばらく本日とす。

◆79 明治三十三年二月二十五日

拝読仕候。三月三日寿筵之儀小生へも申来り候。然ルニ小生本月下旬とかく気分すくれ不申精神過敏に相成、すこしの事も肝積にさわりムシヤクシヤと致し候間、来月初旬よりいつれへか旅行の心組に御座候。よつて寿筵にもまゐり不申候。寿詞はあまりおもしろくなきものに御座候。寿序などもよく出来候ものまれに候間小生はあまり作り不申候。尊作拝見第二首の後聯至極妙に奉存候。尊恙いかゞ。小生何となく此世かいやなり申候。当年中には自然道山の人となるへくと被思候。寿詞なとさら／＼思ひかけ不申候。不平のみつり申候。何カ馬鹿／＼しくおかしき事に御座候。発狂なといたすもの、起初はかくの如きものにやと我ながら被存候。書到此啞然独笑。是亦発狂精神之候か呵々。頓首。

二月廿五日

百川

梅潭先生坐下

〔封筒表〕駒込千駄木林町二百廿一番地杉浦梅潭先生貴報、小川町壱番地依田百川

〔消印〕「□」・□三年二月・二十六日・イ便」

*卷末に「二十三年か」と墨書あれども梅潭筆にあらず。内容から明治三十三年。同年三月三日芝紅葉館に於ける三島中洲七十寿筵の事ならむか。されども学海は中洲伝を、梅潭は寿詩二首を奉ず。梅潭詩第二首は、客滿樓頭酒滿觥、醉魂不省暮寒生、荒途艱險昔年夢、勝概扈從今日榮、一代青雲懸組綬、幾人白髮共功名、席間寿頌金声起、展読篇篇見性情（『従心寿言』）。

◆80 明治三十三年三月九日

昨日御来訪被下候よし不得拜謁残念奉存候。高作拝見不相替妄意之改删かへすくも恐入候。あしからす御海恕可被下候。近來とかく気分あしく、これには難儀いたし居候。拙詩少々煩御删正候。御ついで節御精評奉願候也。

梅潭先生

百川

〔封筒表〕 千駄木林町二百廿一番地杉浦梅潭先生御報、小川町壹番地依田百川

〔消印〕 「」 三月・九日・又使

* 既に三錢切手使用ゆえ三十三年とす（三十二年四月より）。

◆ 81 明治三十三年四月二十日

昨日は参上種々御馳走被成下、且又わさく御車ヲ以テ御迎被下候段かさねく之御懇待不知所謝候。尊稿拝見失敬申上候。御海恕可被下候。今日来客多くそんしなを御礼延引仕候。早々不備。

四月廿日

依田百川

梅潭先生

附白。仙蝶侍姫にもよろしく。御手製フライ大にむまく帰来荆婦にも話し申候。

〔封筒表〕 千駄木林町二百廿一番地杉浦梅潭先生侍史、小川町壹番地依田百川

〔消印〕（判読不能）

〔封筒裏〕 四月廿日午後四時半

*封筒裏梅潭朱筆で「四月二十一日朝入」。三錢切手使用ゆゑ明治三十二年以後。ただし学海は三十二年の四月十六日から五月七日まで遠州旅行にありしより、本翰三十三年のものたり。前日梅潭宅でしたためし五古の詩箋現存、左に録す。

客歲遊芳山。賞花留三日。一夜逢風雨。天曙衆芳歇。開落驚俄頃。盛衰歎迅疾。去過柳本里。遙望簇絳雪。云是崇神陵。下車恭拝謁。桜花三千株。重瓣香風溢。乃知天地理。乘除迭相出。昨日在墨水。飛紅芳事畢。忽接老友招。曳杖訪林窟。滿園春正旺。紅肌呈麗質。早桜与晚桜。品評苦優劣。彼則喜幽淡。此更愛穠密。清賞縱遊玩。珍差況陳設。对花談文詩。肝膽覺軒豁。回首想曩遊。歲月既數閱。帝魂呼不返。白雲鎖瑤闕。富貴何足道。卑賤自恬佚。行樂須及時。未必論得失。人世同芳菲。榮枯付造物。

庚子四月十九日賞花於杉浦梅潭先生家園席上賦呈

劣弟 依田百川初草

◆82 明治三十三年五月三日

尊翰拜読仕候。本日は意外之大雨いか、御くらし被成候や。敬所書印譜之序并川口氏の詩拝見仕候。不相替失敬申上候間よろしく御取捨可被下候。先日川口氏よりたのまれ運筆順序と申書の序をつくり申候。いつれ御覧之事とそんし候。信夫恕軒昨日まゐり終日文談いたし候。恕軒の伝先日二篇つくり申候。草稿のまゝ入笑覧候。御次之節御返却可被下候。随分本人の氣象をありのまゝにのへ候つもりに候。吉田賢輔の伝をもつくり申度、本人の履歴尊君様御承知候は、御知らせ被下度、又は吉田の養子に御問合せ被下候てもよろしく、これは松坡よりの話も御座候。○小生先月の末よりとかく気分あしく終日被を擬しころくいたし居候。旅行でもいたしたらはよか

らんとそんな候得とも独行もおもしろからず、もし御旅行も候は、御とも可仕と奉存候。塔之沢位ならは妙なりと奉存候。早々。五六日位なるへし。

五月三日

百川

梅翁先生侍史

〔封簡表〕 本郷区駒込千駄木林町二百廿一番地杉浦梅潭先生御報、小川町老番地依田百川

〔消印〕 〔一〕 〔二〕 〔三〕 〔四〕 〔五〕 〔六〕 〔七〕 〔八〕 〔九〕 〔十〕 〔十一〕 〔十二〕 〔十三〕 〔十四〕 〔十五〕 〔十六〕 〔十七〕 〔十八〕 〔十九〕 〔二十〕 〔二十一〕 〔二十二〕 〔二十三〕 〔二十四〕 〔二十五〕 〔二十六〕 〔二十七〕 〔二十八〕 〔二十九〕 〔三十〕 〔三十一〕 〔三十二〕 〔三十三〕 〔三十四〕 〔三十五〕 〔三十六〕 〔三十七〕 〔三十八〕 〔三十九〕 〔四十〕 〔四十一〕 〔四十二〕 〔四十三〕 〔四十四〕 〔四十五〕 〔四十六〕 〔四十七〕 〔四十八〕 〔四十九〕 〔五十〕 〔五十一〕 〔五十二〕 〔五十三〕 〔五十四〕 〔五十五〕 〔五十六〕 〔五十七〕 〔五十八〕 〔五十九〕 〔六十〕 〔六十一〕 〔六十二〕 〔六十三〕 〔六十四〕 〔六十五〕 〔六十六〕 〔六十七〕 〔六十八〕 〔六十九〕 〔七十〕 〔七十一〕 〔七十二〕 〔七十三〕 〔七十四〕 〔七十五〕 〔七十六〕 〔七十七〕 〔七十八〕 〔七十九〕 〔八十〕 〔八十一〕 〔八十二〕 〔八十三〕 〔八十四〕 〔八十五〕 〔八十六〕 〔八十七〕 〔八十八〕 〔八十九〕 〔九十〕 〔九十一〕 〔九十二〕 〔九十三〕 〔九十四〕 〔九十五〕 〔九十六〕 〔九十七〕 〔九十八〕 〔九十九〕 〔一百〕

*松坡は田辺松坡、前述。恕軒の伝は他の諸文四篇とともに向島の別墅で執筆（四月二十三―二十七日の間。「信夫恕軒伝」「信夫文則伝」。その一は「信夫恕軒先生伝」として後年の恕軒遺稿（大正七年刊）巻頭に置かる。吉田賢輔は名彦信、称定吉、竹里と号し、旧幕士。古賀茶溪門の程朱学者たりしも洋書に詳しく蕃書調書や外国奉行の書記を務め、維新後は慶応や共立にて教授。大蔵省文部省にも雇はれ貨幣史、日本教育史資料等編纂。明治二十六年十月十九日没五十六歳。晩翠吟社中にも出入し学海梅潭の詩友たり。中風に罹りし梅潭はこのち二十四日に倒れ病床にあり。三十日朝没す。七十五歳。梅潭あての書翰最後のものなり。翌三十一日には祭文したため几前に呈すと（日録）。屋梁落月帖に載せたる自筆の祭文、左に録す。

祭梅潭先生文

明治卅三年五月卅日。杉浦梅潭先生病歿於東京駒籠私第。嗚呼。幕朝遺老殆且尽矣。謹堂匏庵黃邨海舟貫堂竹里諸先生。相尋凋殞。雖知盛衰存亡之理。修短寿夭之数。不能禁吾老淚之漣漣也。顧謹堂以下諸先生。吾或知其声望學識矣。未能熟知其曲折之心情也。或辱其下交啓發矣。未能悉得其忘形之款誠也。而自吾識君於

東京集議院。爾來三十余年矣。經史商確。詩文論評。攀妙義金洞之屹嶂。登函山豆嶺之崢嶸。賞墨水之桜花。翫茗溪之月明。交情日密。寸心相傾。時而促膝細語。時而拍案大聲。不知日之將暮夜之幾更也。嗚呼。君之在幕府。嘗為閣老板倉侯所拔擢。良籌奇謀。參與帷幄。遭時多難。調停委曲。世或目為因循姑息。彼燕雀之輩。安足知高飛之鴻鵠耶。方幕府還政。皇室中興。適君鎮函館。聽命朝廷。封庫戒吏。率循典型。尋廷議拳賢能之士。首用君鎮庄物情。君之才望可以徵矣。未幾勲闕爭進。簡故老。群小窺隙。俄變涼燠。於是乎。君早脫乎樊籠。而翔乎雲表矣。自此爾後。閉門却掃。不以世事煩其靈台。間暇無事。刻苦賦詩。遠溯淵源。博採良材。出入乎唐宋之門。而摩盪乎漢魏之壘。藝林耀光。詩學大開。天下莫不知梅潭先生之達識雄才也。況於高風清節。終始一歸乎。百川資性偏急。動不利於口。言發謗興。少可多否。辱君交以來。百方調護。拳美掩醜。幸得全声名於江湖。未嘗不由其遇我之厚也。嗚呼君則逝矣。君之言語不可復聞矣。峨洋風月。依然猶存。俯仰天地。血淚漚肝。吾今年六十有八。耳目雖明精神稍昏。知不得長視息乎人間焉。今作此文并以自傷。不独致祭於君也。君且一笑以聞我言。謹再拜以告。

明治卅三年五月

友人東京依田百川頓首